

# らいいプラス

塾や民間団体が、高校段階など10代のうちから海外で学ぶ学生や生徒を増やそうと知恵を絞っている。全国各地にある塾が地方の高校生らと留学先をつなぐ「窓口」になる取り組みが始まったほか、留学支援団体は高校への働き掛けに汗をかき、若者の「内向き志向」を打破するため、試行錯誤が続いている。

茨城県取手市の高校2年生、海老原瑞季さん(17)は1月、大学進学を1年後に控え、自宅近くにある学習塾「翔智塾」(同県守谷市)の門をたたいた。といつても受験に備えた勉強のためではない。米国の大学進学に必要な助言などを受けるためだ。

出迎えたのは中村五十一塾長と「ISC留学net」(本部・浜松市)代表の大場規之さん。「日本の大学に行くより成長できる」と意思を固めた瑞季さん。渡航費用やこの大学を目指すかなどを相談しながら、具体的なスケジュールを話めていく。今夏から半年間米国に留学する大学3年生の姉や母親(44)とともに、熱心に耳を傾けた。

ISCは2009年、大場さんが社長を務める「和田塾」(浜松市)を中心に、東北から九州地方まで約45の塾が連携して発足。各塾が窓口となり、留学の仲介経験が豊富な和田塾のスタッフらが留学希望者とインターネット電話「スカイプ」で話したり、塾に向向いたりして相談に応じる。

「留学支援会社は大都市圏に集中していて、地方都市との情報格差が大きい。地元で根付いた塾の協力で、地方から海外に行く道筋を整えたかった」と大場さん。08年には大手留学代

## 塾が懸け橋

理店の「ゲートウェイ21」が破産し、社会問題にもなったが、瑞季さんの母親は「(窓口となった塾は)よく目にする塾で安心感があった」と話す。

☆☆☆

文部科学省のまとめによると、08年に海外の大学や大学院に留学した日本人は前年比11%減の約6万6千人。04年のピーク時から2割減るなど、内向き志向が鮮明だ。「逆に企業側は海外経験を持つ学生に対する採用熱を急速に強めている」(大場さん)。ISCには小中学生のころから将

## 企業の採用熱 見据え「内向き志向」打破を後押し

来を見越し、海の内についで目を向ける子供や保護者の相談も舞い込む。

長野県大町市の中学3年生、中村京平君(15)は松本市のISC支部を通じ、今夏から3年間、米国の高校で学ぶ。就職はまだイメージがわかないが「大卒でも就職できない人のニューズなどを見て『何か特徴を身につけない』と思った」。大学まで米国で学ぶことも視野にある。

海外の大学への進学ではベネッセコーポレーションが08年、米ハーバード大など世界トップ校への進学を目指す少人数制の学習塾「ルートH」を始めた。ISCは留学先のレベルをより広くそろえ、「多様な若者に海外を目指してほしい」(大場さん)とする。

海外大学を目指す高校生のための講座を設ける塾も現れた。「お茶の水セミナー

## 連携し窓口役・海外大併願コース…

## 海外留学



翔智塾で海外進学に向けたカウンセリングを受ける海老原瑞季さん(左)

ール」渋谷校(東京・渋谷)は今春、国内外の大学受験を向にらみで指導する「海外大併願コース」を開設。中高生が対象で、授業はすべて英語だ。海外の大学が入学選抜に使う英語能力テスト「TOEFL」の対策に重点を置く。

☆☆☆

高校に対して、海外進学の魅力を発信する取り組みも始まっている。

留学支援会社でつくる海外留学協議会(JAOS、東京・新宿)は昨年、札幌や新潟など各地で進路指導担当の高校教諭を対象にしたセミナーを開催。海外の大学を進路の一つとしてP

## 学ぶ

Rした。東京会場ではルース駐日米大使が講演し、日本の教育交流の重要性を訴えた。

「日本の大学進学にばかり目を向けるあまり、留学を勧めるどころか止める教諭も少なくない」とJAO

Sの林隆樹事務局長。セミナーも名古屋や広島では約500校に案内を送ったが、参加はゼロだった。そ

れでもセミナー後に「企業の採用にグローバル化の黒船が来た。進路指導も変わらなければ」と話す高校教諭もおり、林事務局長は手応えを感じている。